

【第一回】「漢字（五体）の基本と書き方」
— 漢字の書体について —

常葉大学教授
本誌編集委員 平形 精逸

◇はじめに

漢字の五つの書体の中で、日常的に使用される楷書と行書は親しみやすいためか、本誌への出品もかなりありますが、他の三書体はグリーンと少なくなっています。この講座ではこれら五書体すべてに興味・関心をいただき、どの部門にも出品いただけるよう、各書体の特質と基本的な書き方を概説します。次回より楷書は三回、行書からは二回ずつ取り上げます。今回は漢字全体にかかわる書体のはなしです。

■書体の種類

文字の形を表す語には、字体・書体・字形などがあります。混同しやすいのですが、ふつう次のように区別しています。

「字体」とは一点一画から成る文字の骨組みのことです。主に国語や文字学の立場からとらえる場合で、例えば、書き取りなどは字体の正誤

です。高校では実用にとられない漢字五体すべてに、変体仮名も加わります。

図1

校種別	学年等		位置付け	二側面の関係	字形のとり方
	1 2 3 4 5 6	1 2 3			
小学校	1 2 3 4 5 6	1 2 3	国語科書写	言語性(用)	正整・整齊
中学校	1 2 3	1 2 3	国語科書写	言語性(用)	均齊
高等学校	I II III	I II III	芸術科書道	造形性(美)	均齊

文字の種類等
楷書 行書 草書 隷書 篆書
片仮名 平仮名 変体仮名
漢字 漢字仮名交じり文(書)

小・中学校の楷書は学年別配当漢字の字体を標準としますが、高校では臨書によって、書写体や旧字体も学習します。

字形は筆使いと合わせて最も大切な書写の要素です。正しく整えて書くためには、外形・中心のとり方、長短・画間・方向・接し方・交わり方に注意して、組立て方を理解する必要があります。行書もこの整齊な形をふまえ、連続や省略などの特徴を学びます。

高校では均齊に加え、高度なバランスによる均衡の美しさも表現・鑑賞します。このために

を判定する試験といえるでしょう。

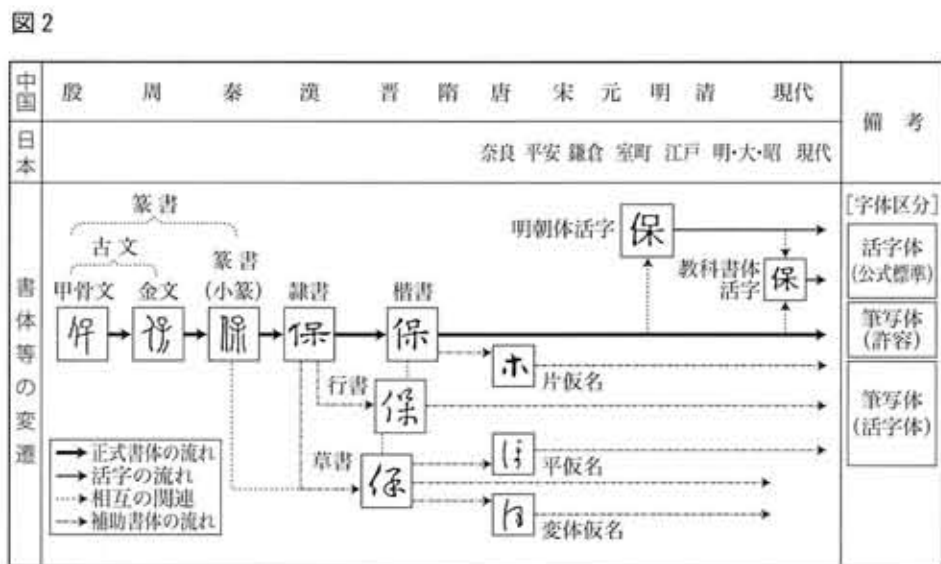
「書体」とは文字の様式(スタイル)のことで筆写体と活字体とに分けられます。中国で長い



は五体すべてが必要となります。

■書体などの移り変わり

図2は五つの書体などの変遷を示しています。中央には左から右へ、正式書体といわれる篆書・



年月を経て書き継がれた筆写文字は、形態や用筆などの面から共通の特徴を備えています。これを五つに分けたものが本誌で取り上げられている書道書の立場からの書体です。

もう一方は、明朝体を代表とする活字の種類(フォント)を表す場合で、情報化時代の今日では数多くの書体がつくられています。

また「字形」とは、筆写体・活字体を問わずすべての文字の形に対して用います。

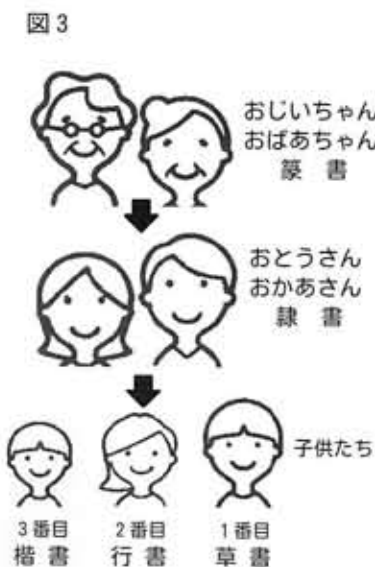
■書体・字体・字形と書写書道

書写書道に対応する書体は図1のとおりです。小学校では楷書、中学校では楷書・行書ですが、それぞれに調和する仮名の書き方も併習し

隷書・楷書が置かれ、下方にはそこから派生した補助書体といわれる草書・行書と、わが国でつくられた三種類の仮名の名称が並んでいます。さらに右上には、かなり遅れて誕生した明朝体活字などが図示されています。

例字の「保」は、「人と子と生まれた子どもに着せる産衣」を組み合わせた会意文字(白川静「常用字解」)です。「甲骨文→金文→小篆」の流れでは、バランスなどから字画はやや複雑化しますが、以降は用途や速書の必要から略化がすすんでいくことがわかります。

なお、ここで注意しなければならないのは、楷・行・草三体の発生の順序です。学校教育ではこの順ですが、図3を見てもおわかりのように三体は共に隷書を母体(草書の一部は篆書から)とし、草書が最も早く、楷書は遅れて生まれた末っ子なのです。



書体	篆書	隸書	楷書	行書(調和体)	草書(仮名)
時代	殷・周・秦	漢	三国・東晋	→	→
字例					
特徴	概形と重心				
	構え方	横画: 水平 縦画: 垂直 転折: 一画	横画: 水平 縦画: 垂直 転折: 二画	横画: 右上がり 縦画: 垂直(前傾) 転折: 一画	横画: 水平 縦画: 水平 転折: 一画
	向き方				
徴	造形の二大要素	[統一 ←] [制限 ←]	構築性	流動性	[→ 変化] [→ 自由]
	空間的要素 構築性	< 均 斉 >		< 均 衡 >	
	時間的要素 流動性	< 収束 (緊張) >		< 発散 (緩和) >	
書法	書き方	一画ずつ離す	→	→	続ける (誇張・抑制)
	用筆法	逆筆・蔵鋒	→	順筆・露鋒 逆筆・蔵鋒	→
キーワード	左右相称 大篆 小篆 荘重感 威厳性 装飾性	波磔 波勢 古隸 八分 荘重感 装飾性	三過折 向勢 背勢 直勢 規範性	連続 略化法 筆脈 多様性 速書性	章草 今草 略化法 曲線的 筆脈 簡素化 情趣性

図4 漢字(書体)の特徴と相互の関連 (『書の古典と理論』より 作成 平形 一部 修正)

■漢字五体の特徴と相互の関連

楷書は最後にできた書体ですが、五書体を比較するときには、楷書を中央にして左から篆・隸・楷・行・草と並べるのが一般的です。

図4は、古来すべての基本点画が集約されているとされる「水」字を最上段に置き、各書体の特徴や関連を示しています。

まず概形(外形)と構え方について、篆書は縦長、隸書は横長で共に水平に構えています。これに対し、三国以降に定着した楷・行・草の三体は、右手による書きやすさから右上がりの構え方になります。すなわち、書写の動きに支配されるわけで、字形には自ずと生命が吹き込まれ、さらに筆順の原理から文字には前後の関係が生じてきます。

中段は、これらの特徴を人間のポーズに例えてビジュアル化したものです。篆書は左右対称が基本ですから正面向き、隸書は波磔が入りますがまだ水平の構えを保っていますので、斜めの向きといったところでは、三体はいずれも側面形で、楷書は横画が右上がりになるために右下に足をつっぱってバランス



イラスト: 橋本晴乃

スをとるので前のめり(前傾)となりまです。行・草もこの構造をふまえています。宋時代の有名な書家・蘇東坡は三体を人間の動作に例え、「真(楷書)は立つが如く、行は行く(歩く)が如く、草は走るが如し」と説明しています。

中段から下段にかけては、五書体の関連を造形上の二大要素、構築性と流動性を用いて図示しています。いずれの書体であっても両者は不可欠ですが、篆書は構築性が、草書は流動性が大半を占めるものの、それぞれもう一方の特性もそれを補います。楷書は両方の要素が同じくらい含まれていることとなります。また、構築性の強い書体は、統一的であり、流動性の強い書体は、自由度が高いともいえるでしょう。さらに、構築性が働く空間的要素は、均斉と均衡が、流動性が働く時間的要素は、収束と発散が、各書体によって比重を変えながらもそれ

■生活に生きる漢字五体

それ相互関係を高めているといえます。抽象的に理解しにくいかも知れませんが、次回以降の各書体学習の参考にして下さい。

平成二十一年九月号の拙稿「臨書考」で、「茶」百文字を古典から集めて臨書した「百茶文」が富士山静岡空港の出発ロビーや、JR静岡駅南口の「しずおかO・CHAプラザ」に掲げていることを紹介させていただきました。これは漢字五体による書の歴史と文字文化の悠久なロマンの大パノラマともいえるもので、レプリカですが県外にも展示されています。東京では、JR有楽町駅前の交通会館地下一階にある静岡県観光案内所にも置かれ、来訪者の眼を楽しませていきます(写真)。

